

政ちゃんと赤いりんご

小川未明

青空文庫

田舎のお婆あさんから、送^{おく}つてきたりんごがもう二つになってしまいました。

「政ちゃんなんか、一日^{いちにち}に三つも、四つも食^たべるんだもの。」

「僕^{ぼく}なんか、そんなに食^たべやしない。勇^{いさむ}ちゃんこそ三つも四つもたべたんだい。」

二人^{ふたり}は、いい争^{あらし}いました。そして、残^{のこ}った二つのりんごを、どちらが大^{おお}きいか、めいめいでにらんでいました。

一つは、いくぶんか大^{おお}きいが、色^{いろ}が青^{あお}かったです。一つは、小^{ちい}さいが、赤^{あか}くて美^{うつく}しく見^みえました。

「僕^{ぼく}、この大^{おお}きなほうを取^とろうや。」と、弟^{おとうと}の政^{まさ}ちゃんが、すばしこく手^てを出^だして、大^{おお}きなりんごを握^{にぎ}ろうとしました。

「それは、おれのだい。」

兄^{あにいさむ}の勇^{いさむ}ちゃんは、政^{まさ}ちゃんの小^{ちい}さな手^てでつかんだ、りんごを奪^{うば}ってしまいました。

さあ、たいへんです、二人^{ふたり}は、そこでつかみ合^あいがはじまりました。畢竟^{つまり}、年^{とし}の少^{すく}ない政^{まさ}ちゃんは、かたがたいませんでした。

「お母^{かあ}さん、僕^{ぼく}のりんごを兄^{にい}さんが奪^とってしまつたんですよ。」

泣きながら、政ちゃんは、お母さんのところへ訴えてゆきました。

「うそですよ、お母さん。僕は、大きいから、大きいのを取ったのです。政ちゃんは、小さいから、小さいのを取るのがあたりまえなんですネ。」と、勇ちゃんは、つづいて、お母さんのところへやってきました。

「そんなことは、きまっています。政ちゃんの持つているものを、なんで無理に奪ったりするんですか。」

お母さんは、こういう場合には、小さいものより、兄さんをしかるのがつねでした。勇ちゃんは、手に、青い大きなりんごをしっかりと握っていました。そして、お母さんの裁判を、不平そうな顔つきをして、うつむいて聞いていました。

「田舎のおばあさんは、僕に、送ってくださいたんでしょう。」と、政ちゃんが、いいました。

「いいえ、みんなに送ってくださいたのです。」

「それみる、政ちゃんは、自分ひとりのものだと思っているからいけないんだ。」

「あんな小さいの、やだ。」

政ちゃんは、からだをゆすって、だだをこねました。

「もう一つのを、持っておいで。」と、お母さんは、おっしゃいました。

「僕、あんな小さいのは、やだい。」と、政ちゃんは、いいながら、紅いりんごを持ってきました。

「まあ、きれいなりんごだこと、ちよつとお見せなさい。」

お母さんは、目をみはつて、りんごをごろんになりました。

「ごんな、きれいなりんごが、どうしていけないの。あんな青いりんごより、よつぽどいいじゃないの。」

「小さいじゃないか。」

政ちゃんも、さつき、小さいが美しいから、どちらを取ろうかと考えていたくらいですから、お母さんにそういわれると、なるほど、青いりんごより、小さくても、このほうがいいように思われてきました。

「これを上手に写生してごらんなさい。」

政ちゃんは、学校で、先生が、こんどなんでも持ってきて、図画の時間に写生してもいいと、おっしゃったことを思い出しました。

「僕、これを学校へ持っていくって写生してもいいの。」

「みごとに描けたら、おばあさんに送っておあげなさい。どんなにお喜びなさるかしれませんよ。」

政ちゃんの機嫌は、すっかり直りました。このとき、勇ちゃんは、とつくに大きなりんごを持って出てしまつて、いなかったのであります。

「おなかが痛い。」

勇ちゃんは、朝起きると、腹を押さえていいました。

「おなかが痛いのに、どうしたんでしょうね。」

「ああ、おなかが痛い。」

「きつと、おなかを冷やしたのでしよう。」

お母さんは、心配して、勇ちゃんのようすを見ていられました。

「ああわかった。お母さん、兄さんは、きのうりんごの皮をむかないで食べたからでしょう。ばちがあたつたのだ。」

そばで、政ちゃんが、いいました。

「だまつておれ。」と、勇ちゃんは、怒りました。

「ばちがあたつたのだ。」

政ちゃんは、いいました。腹を押さえて、すわっていた勇ちゃんが、飛び上がって、政ちゃんを追いかけました。

「お母さん——。」

「生意気いうからだ。」

政ちゃんの呼ぶ声と、勇ちゃんの、とつちめている声とが、もつれてきこえてきました。「けんかをする元気があれば、だいじょうぶです。」と、お母さんは、笑っていらっしやいました。

二人は、お膳の前にすわりました。

「もうおなかがおつた？」と、お母さんは、おききになりました。

「まだ、ちつと痛い。」

「お母さん、学校が休みみたいからですよ、休ましてはいけませんよ。」と、政ちゃんがいいました。

「だが、休むといつた。」と、勇ちゃんは、政ちゃんをパチンとたたきました。

「ご飯を食べるときまで、けんかをするのですか。」

お母さんにしかられて、やつと、二人は静かになりました。そして、ご飯を食べ、学

校へ出かけました。

政ちゃんは、あの赤い、美しいりんごを紙に包んで、学校へ持ってゆきました。

「きれいなりんごだね。」

図画の時間に、小野がふり向いて、いいました。

「こんなにりんごは、めったに見えないね。どこで買ってきたんだい。」と、隣の山田が、ききました。

「田舎のおばあさんから、送ってきたんだ。」と、政ちゃんが、答えました。

「たくさん送ってきたかい。」

「ああ、たくさん送ってきたんだ。」

「いいなあ。」

「だけど、みんな食べてしまつて、もうこれきりないんだ。」

「なあんだ、それじゃつままないな。」

このときです、先生が、大きな声で、

「横を見たり、話をしたりしないで、上手におかきなさい。」と、おっしゃいました。

政ちゃんは、うまく描けて、いいお点をもらったら、おばあさんのところへ送ってあげ

て、見せようと思つたので、一所懸命で描きはじめました。

つぎは、算術の時間でした。ベルが鳴つて、みんな教室にはいったときです。

「僕に、りんごをおくれよ。」と、山田がいました。

「僕が、もらう約束をしたんだい。」と、小野がいました。

政ちゃんは、二人が、ほしいというので困つてしまいました。

「ジャンケンおやりよ。」

政ちゃんの机の上のついていたりんごを、ふいに小野が取つてしまいました。

「ずるいやい。」と、叫んで、山田が、それを奪い返そうとしました。ちようど、昨日、

政ちゃんが、兄の勇ちゃんに向かつてやつたと同じことです。

そのとき、もう先生は、教室においてになつて、じつと二人が、りんごを奪い合

つているのを見ていられました。二人は、大騒ぎをしていました。知らなかつた政ちゃん

んが、気がつくど、

「先生が。」と、注意しました。

二人は、びつくりして、争うのをやめたけれど、遅かつたのです。

「小野も、山田も、こつちへくるんだ。」と、先生は、おそろしい顔つきをなさいまし

た。

「さあ、女の組へいって勉強強せい。」

みんなは、女の組へやられるのが、罰の中でもいちばん苦しかったのです。山田は真つ赤な顔をして、先生に引きずられるようにして、連れてゆかれたけれど、小野は柱につかまって、動きませんでした。先生は、小野のわきの下をこそぐりました。

それでも、我慢をして、はなれまいと柱にしがみついたのです。お席から、くすくす笑う声が起こりました。

「よし、そこに、いつまでもそうやっておれ。」と、山田一人をつれてゆかれました。

「小野、この間に、逃げつちまえよ。」

「逃げたら、後で、よけいにしかられるぞ。」

政ちゃんは、この赤いりんごから、たいへんなことが起こったものだど、りんごを捨て、かばんの中に入れてしまいました。

小野が、教壇の上に立たされて、頭をかいていると、女の尾沢先生が、山田をつけて教室にはいってこられました。

「これから気をつけて、騒がないといえますから、どうぞ、こんどだけは、許してあげて

くださいまし。」と、あやまってくださいました。

「もう、きつと気をつけるね。じゃ、尾沢先生に、お礼を申しなさい。」と、先生は、山田にいわれました。

山田は、顔を赤くして、頭を下げました。そして、山田だけは、お席にはいつて、みんなといっしよに勉強強することを許されたけれど、小野は、先生のいうことをきかなかつたばかりで、時間の終わるまで、そこに立たされていました。

「勇ちゃん、りんごをあげようか。」

学校から帰ると、政ちゃんはいいました。

「りんご?」といつて、勇ちゃんは、かけてきました。

「きのうのりんごじやないか。政ちゃんは、どうして食べないのだい。」

「どうしても、僕たべたくないのだ。」

「おかしいな。」

お母さんも、赤いりんごをごらんになって、

「ほんとうに、くいしんぼうの政ちゃんが、どうしてたべなかつたの。」と、おっしやいました。

「政ちゃん、このりんごを学校で小野と山田が奪い合つて、先生に立たされたことを思い出しました。それを考えると、家に帰つて、かばんからとり出したけれど、どうしても食べる気が起こらなかつたのです。田舎のおばあさんから送つていただいただけに、捨てることもできなかつたのでした。」

そのお話をすると、勇ちゃんは、

「僕、そんなりんごをたべるのはいやだ。」といつて、あちらへいつてしまいました。

「まあ、よくけんかの起こるりんごですね。このことを田舎のおばあさんにいつてあげようかしらん。おばあさんは、きつと兄弟げんかをするようなら、もうこれから送らなうとおつしやるでしょう。」

「もう、けんかをしないから、そんなことをいつてやつちや、いやだよ。」

お母さんは、笑つて、おうなずきになりました。

このとき、ドン、ドン、と、外の方で太鼓の音がしました。

「政ちゃん、りんごをさるにおやりよ。」と、勇ちゃんが、入り口から、のぞいて、いいました。政ちゃんは、赤いりんごを持って、かけ出してゆきました。政ちゃんは、赤いりんごをさるにやりました。

さるは、りんごをもらって、よろこんで、さるまわしの背中せなかにおぶさりながら、コスモスの咲く、垣根かきねに添そって、あちらの方ほうへと見えなくなつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「政《まさ》ちゃんと赤《あか》いりんご」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

政ちゃんと赤いりんご

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>